

『西鶴諸国ばなし』論序説

一、はじめに

『西鶴諸国ばなし』は、西鶴作品中、最も多く論文に取り上げられているものであるといえよう。毎年、数点のあらたな論文が書き加えられている。とはいっても、多くの研究者の問題意識がこの作品に焦点化し、論議が沸騰しているという状況とは、いささか異なっている。

周知の通り、個々の章の典拠に関する論が、その多くを占めているのである。もちろん、たとえ典拠論を主とするものであっても、作品解釈・評価の問題と無関係であろうはずはない。だが、そういった問題に関する論議は、後述するように、昭和四十年代以降は、顕在化することがまれであった。そのため、各研究者の論に内在する価値観や問題意識は、すれ違いを続けているように、私には思われる。

このような状況は、研究者の互いの論に対する無関心に、いくらかは起因しているのかもしれない。各々が独自のコードの内側にあつて論じているために、論点が見えにくくなっている、ということもできよう。いずれにせよ、典拠調査の蓄積状況については、諸注釈類を通して、即座に知ることができるとはなかなかならず、その作業の前提となった、あるいはそこから導き出された「読みの論理」がどう発展してきたかは、容易には把握しがたい。

だとすれば、この『西鶴諸国ばなし』という作品が、どのように読まれ、どう評価されてきたか、そして、典拠論とは次元を異にした、解釈上の問題点はどこにあるのかということ、明らかにする作業があつてもよいように思われる。

このような問題意識そのものが、近年の研究の動向からすれば、いささか青臭くまた素人臭い印象を与えるものであることは、十分に承知している。そのうえで、この問題にかかわつていこうとする以上、やはり研究史の整理から出発するほかはない。個々の研究者独自の用語と文体の背後に存する論理を明確にし、整

理することで、今後の研究が向かうべき方向が見えてくるのではないかと以上が、先行研究の整理だけで大半を占めるようなこの拙論を、ものものしく「序説」と名付けた所以である。

二、説話文学との連続性

―研究史(一)―

『西鶴諸国ばなし』と説話文学の関連については、以前から数々の指摘がなされてきた。副題「大下馬」が「宇治拾遺物語」を意識したものであるということ、諸国にはなしの種を求めたと序文に記されていること、そして、実際に多くの章が説話文学を素材・典拠としていること等々。したがって、この作品の評価において、説話文学との位相が問題となるのも当然のことであつた。

説話文学の特性は、一般には、奇異な出来事を、私意を加えることなく伝達しようとするところにあるとされてきた。とりわけ、昭和二十年代から三十年代においては、密室における個人的な文芸創作の営みとは説話は別種のものであり、その口承的性格からみても、民衆あるいは共同体の共有物である、という側面を強調した理解が目立つ。

戦後の西鶴研究の原点ともいえるべき暉峻康隆氏の、『西鶴諸国ばなし』に対する評価は、極めて低い。その理由は、この作品が説話文学の範疇にとどまるものであるという点にあつた。

暉峻氏は、まず昭和三年の『西鶴研究と評論(上)^(註)』において、『西鶴諸国ばなし』の「題材主義」を厳しく非難する。題材にのみ頼り切り、そこに作者の主體的な感情や感動の表出、すなわち自己主張が見いだせない点に、説話文学一般の限界があつた。『西鶴諸国ばなし』は、その中にあつては、話題に若干の新しさは見出せるものの、やはり説話文学そのものが持つ「作者不在の文学」「自己疎外の文学」という限界の内にとどまっている、というのである。

有働 裕

たとえば、巻三の七「因果のぬけ穴」は、大河判右衛門という武士が息子とともに兄の敵寺田弥平を討つために敵の家に忍び込むが失敗する、という話である。相手を討ちに行きながら果たせず、逃げ出す時に、堀の穴から抜け出せなくなった父親の首を、その息子は素性を隠すために切り落として持ち去るが、その息子もやがては返り討ちにあつてしまふ。悲惨な展開といえるが、そこに暉峻氏は、「はなやかな復讐行為に声援をおくり、成功を期待」するという、当時の一般の民衆とは異なる視点を見出し、その点は評価できるとしている。しかし、敵討ちが失敗した原因が、前世で寺田弥平の一門を八人まで討つていたことであつたという点は、従来の因果譚の形と何等変わるところがない。このことから、『好色一代男』『諸艶大鑑』で展開された個性的な感情の開花が、ここには全く見られず、巻四の二「忍び扇の長歌」などの例外を除き、『西鶴諸国ばなし』における西鶴は、常識的な奇談作者にすぎなかった、という結論に至っている。

このような低調な作品が生まれた背景として、『諸艶大鑑』（貞享元年刊）と『西鶴諸国ばなし』（貞享二年刊）との間に、二万三千五百句の矢数俳諧の興行（貞享元年六月）があつたことに氏は注目している。談林連句の風俗詩的性格は、限られた時間内での句作の数を競い合うことに陥り、町人生活の現象面のみを素描するところへ行き着いてしまった。つまり、この時期の西鶴の談林俳諧の取り組み方そのものが、言い換えれば西鶴の「芸術精神の荒廃」が、『西鶴諸国ばなし』の低調さの原因だといふのである。

この見解は昭和三七年度の「西鶴文学の説話性と非説話性」^(註2)においても変わっていない。「沈潜も燃焼もない安易な題材主義の『西鶴諸国ばなし』は、彼の生涯において文学精神がもっとも荒廃した時期に執筆された作品なのである」と述べている。ただし、その後の他の研究者には、氏のいうような否定的評価の明確な継承は見られない。「忍び扇の長歌」についての、封建制度を批判しえた一章という評価のみが受け継がれていったといえよう。

ところが、逆に、説話文学の範疇にあることを強調して、『西鶴諸国ばなし』を高く評価しようとする見解があつた。それは、説話文学そのものを、民衆の集団的な創造力の具現化として、高く評価しようとする認識の仕方を背景にしていると思われる。

森山重雄氏は、「咄の伝統と西鶴」^(註4)において、西鶴の「説話文学」が、まさに中世以来の説話の持つ共同体的性格、すなわち、風刺精神をともなった談笑性「資本主義社会の人間疎外」が深化する以前の特性——を備えていることを強調している。創造と享受との未分化の状態は、作者の没個性をも意味するはずだが、それ

が暉峻氏の主張とは全く逆に、好ましいものとして認識されているのであつた。もちろん、西鶴はそれ以前の説話とは異なつた認識の方法を見せ、新しい造形方法を取っていることも言い添えられてはいる。たとえば、巻三の三「お霜月の作り髭」は、酒に酔つた坊主とその仲間が、寝ている花婿の顔に墨で髭を書くといういたずらをし、そのため、恥ずかしい姿で詫言をして回る罰を受ける、という話である。これは、共同体の仲間意識の墮落から生じた、個人への干渉と悪戯がテーマであり、それが共同体内部の矛盾を突いていることに新しさを見出せるという。

しかし、そういった、旧来の共同体から逸脱する新しい要素を見出しつつも、結論は次のようなところへ導かれている。

もちろん、こうはいっても西鶴の説話が、咄や笑話とちがつた認識・造形方法をとることによって、共同体の文学としての性格をうしなつたのではない。それは西鶴が封建社会の共同体的な意識からはなれて生活することができなかったと同様、あらゆる点で共同体的な文学なのである。たとえば、「お霜月の作り髭」において、悪戯をおかした五人の人間が、自分達のおかしたおなじ方法によってその罪をつぐなうのは、はなはだ共同体的で、西鶴が説話のすみずみまで共同体的な性格をあたえていることを証している。

森山氏のような発想の、その後の継承発展の一つの形を、水田潤氏の「西鶴諸国ばなし」の近世的性格^(註5)に見ることができよう。

氏は、「忍び扇の長歌」を近世読者の感情充足を果たすものとしてとらえ、「傘の御託宣」には西鶴の個人的な「エゴの解放」を、巻三の四「紫女」には「写実の手法」を読み取っている。これらは、いずれも中世説話にはない「近世的性格」であるのだが、そのこと自体よりも、それらをいかにうまく民間伝承的発想と複合させているか、庶民感覚との平衡を保たせているか、ということに重点があり、「西鶴の民衆への回帰、伝承の形式をとおした新しい造型」という点が強調された論となつている。水田氏の論の前提には、「作者のエゴが批判の姿勢で政治や道徳に対立するのは近代の文学精神」であつて、それを西鶴に求めるべきではないという認識があるのである。

今日、暉峻氏のような主張を、近代的自我を尺度として西鶴作品を論じる一面的な見解とし、また、森山・水田両氏の主張を、行き過ぎた「民衆」評価によりかかつた論として、ともに斥けることは容易であらう。ただ、作品の価値というものをストックに論じようとしたこれらの論議が、この後、どのような形で継承されたのか、あるいは継承されなかったのかということを、問題にしてみる必

要があると思われる。そのために、以上の二つの評価の在り方を、いま一度整理してみよう。

暉峻氏の立場は、西鶴作品内に「近代」要素をできるだけ多く見出そうとするものであった。町人者における集団描写や無名性などの「近代」創作手法を高く評価する立場からみれば、共同体的な「咄の伝統」との関連については、否定的にならざるをえない。それは、前時代の残滓にすぎず、そういった要素の強調は西鶴の賛美にはつながらないのである。また、それとは逆に、商品化された資本主義段階の文学以前の共同体の文学にこそ、民衆との一体感という価値が見出せるというのが、森山氏・水田氏の見解であった。

とすると、奇妙なことに、この二つの対照的な評価の姿勢は、実はいずれも共通の基盤——『西鶴諸国ばなし』は本質的には中世説話文学の圈内にとどまる文学作品である、という見解——に立脚していることになる。この見解に立つため、説話文学に対する二つの評価が、そのまま『西鶴諸国ばなし』の評価へと移行されていたのである。

三、典拠研究と西鶴の方法

—研究史(二)—

先の二つの見解が示されたのと前後する時に、それらとは微妙に方向性を異にした、岸得蔵氏の論が出されている。それは、その後の『西鶴諸国ばなし』研究の方向性を予見するものであったといつてよい。

昭和三年の『西鶴諸国はなし』考——その出生をたずねて——^(注)での岸氏の問題意識は、そもそも、序文に「国々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」とあることを受けて、西鶴はどこまで忠実に話の種を拾い集めているのか、を証明することにあつた。従つて、題材主義で自己主張のない作品、という暉峻氏の見解に通じるようにも思えるのだが、結論的に次のように評している。

彼(西鶴)は広く世間を見、伝説の海を泳いだ。いかほど荒唐無稽な伝説に出会った場合でも、知的批判を加えず、それ自体興あるものとして素手で受け取り、やがて自らが主体となつて新しい説話の創造に参画した。

「新しい説話」と言うときの「新しさ」とは何か。単に話題が新しくなり、近世期の怪異や人事が話題に加えられたという意味にとどまるのか。また、「知的批判を加えず」に「自らが主体と」なるかどうか。その説話的な方法の中には、西鶴独自の認識が見出されるのか否か——これらの点についての詳しい言及はない。ただ、暉峻氏によつて否定的に論じられていた先行説話との深いか

わりが、ここでは積極的に評価されている。しかも、民衆や共同体との関連からではなく、さまざまな話題を積極的に収集しようとする、作家個人の姿勢が問題とされている点に特色がある。

説話文学との連続性の強調から、いかに説話を収集・選択・改編したかという西鶴の主体性の問題へ——このような論点の変化にもなつて、『西鶴諸国ばなし』の研究史は、第二段階に入ったと考えられる。その観点を最初に明確に打ち出したのは、江本裕氏の「西鶴諸国はなし——説話的発想について——」ではなかったか。氏は、中世説話文学を、作者の創作意識がほとんど加わっていないものと定義したうえで、西鶴の特異性を論じている。そして、『西鶴諸国ばなし』は、典拠から独立した形で、それをどう作り変えていくかという読者の期待に応えようと、「相当気負つて」書かれたものであるとし、その根底にあるのは、世態風俗を嘲笑の中に詠み込んでいく、矢数俳諧に見られる俳諧の方法であるとしている。

また、ほぼ同時期に堤精二氏は、『近年諸国咄』の成立過程^(注)で、仮名草子の怪談・奇談との決定的な相違を明らかにすることをテーマとして、その先行文学の摂取の方法を論じた。そして、その中で、『新御伽婢子』(天和三年刊)にヒントを得て『伽婢子』を利用したのではないか、という見解を述べている。その一方で、岸氏のような「説話の素材を徹底的に追及する方法」とは別に、氏自身は「西鶴の創作技法を考慮に入れつつ」先行作品を検討する方法をとることを主張し、既製の伝承に根ざしながらも「もとの事をしくみて、それをあらぬ事にしなす」(『西鶴自註独吟百韵』)という俳諧的技法において西鶴の真価は発揮されている、としている。先の江本氏の発想にかなり近いものがあるといえよう。

ともあれ、『西鶴諸国はなし』に対する、中世説話との連続性を強調しての毀誉褒貶はあまり見られなくなる。かわつて、西鶴の積極的な説話収集と、その「俳諧化」や「はなし」の方法が評価されることになった。そして、この作品は、西鶴の小説技法を説明する上での格好の対象——もつとも西鶴らしい性格を備えたものとしても扱われるようになる。かつて暉峻氏に、執筆当時の西鶴の文学精神の荒廃を示すものとされた矢数俳諧との関連にしても、その意味づけが大きく変化する。金井寅之助氏や富士昭雄氏^(注)においては、その事前の準備として数々の説話・巷談が収集され、書きとどめられて創作ノートのようなものとなつていた、という推定によつて、積極的な意味あいでも注目されるようになる。

しかしながら、先の江本氏・堤氏の論においていささか物足りなく感じられるのは、世態風俗の摂取にしろ、先行説話を「あらぬ事にしなす」改編の手法にしろ、「俳諧化」ということで結論づけられ、それ以上の意味が論じられていない点

である。つまり、西鶴の創作意識や作品評価の問題、あるいは作品論的な観点の追究が、方法論のレベルにとどめられ、結果的に『西鶴諸国ばなし』の獨創性が見えにくくなってしまいうようにも思えるのである。もちろん先の二氏の論は、問題提起としての意味を持つているのであるから、あえて批判がましく追及すべきではないだろう。ただし、この傾向は、この二氏以外の、その後の多くの論稿においても共通してみられるのである。

たとえば、井上敏幸氏は、『西鶴諸国はなし』の素材と方法―巻一の「公事は破らずに勝つ」―において、典拠の精査から、西鶴がいかに情報を迅速に把握し、作品に盛り込んでいくかを証明して、現代社会を凝視するという西鶴の作家的姿勢を見出している。また、『西鶴諸国はなし』攷―仙郷譚と武家物語―においては、「原拠の倅をとどめなかつたかたちでもって自己の表現世界を完結させる」のが西鶴の手法であり、それを西鶴の「原拠離れの手法」あるいは「あらわな典拠主義の拒否」とも呼んでいる。

これらの典拠に関する調査が、『西鶴諸国ばなし』研究を大きく前進させ、今も多くの示唆を与え続けていることは、いうまでもないことであろう。ただし、結論として示された各章の理解の在り方は、この作品の独自性を十分に語り尽くしたもののには、まだ成りえていないのではないだろうか。

巻三の五「行末の宝船」は、諏訪湖の底から帰って来た根引の勤内という男に誘われて、六人の男が竜宮の都を目指して玉船に乗り、波間に沈んだが、十年を経ても戻ってこなかった、という一章である。井上氏はこれを、無分別を戒めよというありきたりの教訓を、風俗描写をまじえて面白く語ろうとしたものであると理解している。また、同様に、巻一の四「傘の御託宣」は、「傘の神姿の、いな所」にひかれて、自ら若い娘の身替にたつた「色よき後家」が最後に登場するが、この好色性を、説法者が眠気覚ましに用いた笑話ととらえる見解を記している。このように理解するならば、『西鶴諸国ばなし』に内在する認識は、通俗的な世間智となら変わるどころがないものであり、ただそれを多くの典拠で飾って見せたにすぎないことになってしまふ。巻三の一「蚤の籠ぬけ」についても、氏の述べているように、この章のテーマは、典拠である『三人法師』のテーマに即して理解しなければならぬとするならば、典拠に寄り掛かったかなり後ろ向きな作品である、という評価の仕方も可能となり、この章独自の価値は見出し難くなってしまうようにも思われる。

また、宗政五十緒氏は、『西鶴諸国はなし』の成立^(注13)において、氏のこれまでの詳細な典拠研究をふまえて、西鶴はいくつかの典拠を複合させて洗練された構

成の作品に仕上げている、と指摘している。そして、そのことを成立論と関連させた、次のような理解を示している。

すなわち、これらの諸章は短日月の間に創作された、というよりも、原型がまず出来て、それが話され、その「はなし」が屢々人前で話されているうちに、筋が発展したり、部分が補充されあるいは削除されたりして、単純なすじの「はなし」から複雑な構成の「はなし」へと彫琢され洗練され、一篇の「はなし」になったと考えるのである。

そして、さらに序文・書名等の問題とも考え合わせて、西鶴の既に持っていた「はなし」のレパートリーを、「辻ばなし」風に編んで出版したものが『西鶴諸国ばなし』であると結論づけている。

確かに西鶴は、先行の説話・巷説を組み合わせて複雑化させている。そしてまた、そのことを、「洗練された」構成に作り直されている、と評することもできよう。だが、複雑化され洗練された『西鶴諸国ばなし』の世界とは、「辻ばなし」とは、本質的に異なるところのないものなのだろうか。

先行の説話を無批判に寄せ集め、それらを出来のよい「辻ばなし」や、巧みな説法者の口調で、あるいは「俳諧化」の意識で文章化したにとどまるなら、やはりこの作品には、さして高い評価を与えることはできない。少なくとも、かつての暉峻氏森山氏の問題意識を乗り越えたというよりは、避けて通ってきたということにもなりそうである。井上氏らの論よりも以前に、浅野晃氏は、『枕久一世の物語』と『西鶴諸国はなし』―方法と主題^(注14)―において、「多種多様な話題を性来の話芸的な方法によって読者の前に提供し懸命にサービス」するという西鶴の「方法」を評価しながらも、「ここにも作家精神の危機的状態が潜んでいた」と、暉峻氏の見解を援用しつつ述べている。この作品の方法についての論と評価との乖離が続く以上、つきつめればこのような位置付けにとどまざるをえないのだろうか。

主体的に先行の説話・巷説を組み合わせ、改編して行く西鶴の方法―それが、「俳諧化」の方法あるいは「はなし」の手法であると説明されると、それ以上の追究がなされず、そのような手法で作られた世界そのものが持つ新しさや特異性の内実が論じられなくなる・・・これは、方法論に論議が集中していることに問題があるというより、方法という問題が極めて表面的にしかとらえられていないことに問題があるように思われる。

もっとも、これは私の浅学ゆえの疑問であって、各研究者は、「俳諧」あるいは「はなし」という語の内に、方法論をこえた近世的な内実を見出しているのかも

しない。言わずもがなの事柄の説明を、執拗に求めているにすぎないという不安は感じている。だが、どうしてもここでは、先のような方法論の問題を、それを用いた作品の書き手の認識と関連させて考えてみたい。かつては作者不在の文学とされていた、いわゆる説話の研究においてさえ、その文体や視点に書き手の主体性を見出そうという試みが、なされるようになって久しい。既成の説話を新しい構成に組み入れ、新たな文体で書き綴って行くことにともなう行われた、西鶴の「創造的認識」の形を、私なりに納得のいく形で明らかにしてみたいと思うのである。

四、「方法」から「認識」への可能性

―研究史(三)―

実は、そのような、書き手の認識にまで迫ろうとする研究の方向性は、一連の江本氏の論稿において既に提唱されている。

先にも述べたとおり、氏は、昭和三七年度の「西鶴諸国はなし―説話的発想について―」では、中世説話文学との本質的な差異を、矢数俳諧との関連で説明していた。ところが、昭和四〇年度の「西鶴に於ける説話的方法の意義―雑話物を中心として―」においては、従来の『西鶴諸国ばなし』に対する論は、原拠との関わりを「咄の俳諧化、パロディ」として説明したにすぎないと自ら不満を述べ、これらは、この作品における「手段」であって、「本質」ではないと指摘する。そして、各章における描写の特異性に注目しつつ、新たに次のような主張をしている。

「諸国はなし」の成功は、従来の怪異奇談が常套としていた教訓的抽象的描写を拒絶して、すべてを行動的具象的に描いたことと同時に、それらが単なる笑いの種として孤立せず、作者が志向した意図に密着し、正銘の咄(小説)になり得たところにあると思う。単なる俳諧の笑いではなく、所謂咄本の咄でない理由はまさにこの点にあるのだと考えられるのである。

その後も江本氏は、昭和四二年「西鶴小説における「説話性」について(一)」で、再び「説話性」の語義を根本から問い直して同じテーマを追究し続ける姿勢をみせ、次いで、昭和四五年「西鶴諸国はなしと懐視」では、森山重雄氏の論を引きながら、西鶴の方法が、共同体的方法をどう継承しているかではなく、それをどう拒絶していったかに注目すべきである、と主張している。そして、伝統的なものを崩そうとする方法が取られているならば、「その方法が彼の認識とどうかかわっていたかが最大の問題」となる、という見解を述べている。

以上のように、江本氏は、方法論の問題を表面的なレヴェルにとどめることな

く、「作家が志向した意図」や「認識」にまで踏み込んで考える必要を提唱している。もちろん、これらの「意図」や「認識」が、江本氏の諸論において、具体的に説明されたというわけではない。あくまでそれは、研究の在り方についての提言にとどまっている。そして氏は、この問題へと踏み込んでいくには、何よりもまず典拠の探索に力を注がねばならないとする。

作家にとって、あるいは、作品にとって典拠とは何であるのか。また、どのような場合でも、典拠を知り得なければ、作者の意図や作品の価値は論じられないものであるのか―そのように一般化してとらえ直したときには、さまざまな疑問も生じよう。その点については後述することにして、ひとまずは、ごく常識的に、典拠を知ることが作品の本質的理解において有効であると認めるならば、先の江本氏の諸論からは、より深い問題へと踏み込もうにも、典拠調査が進行中の現段階では、恣意的な結論にならざるを得ないことに對する、一種のもどかしさが感じられる。

だとするならば、「西鶴諸国ばなし」研究が、当分の間、典拠探しに終始するような傾向となるのも当然のことであった。西鶴が、説話文学の伝承者たちとは、いかに異なった認識を持ちつつ創作したかという問いの答えは、西鶴がどのように典拠説話を利用したか、という方法そのもののなかに、内在しているはずである。私が先に記した、井上敏幸氏や宗政五十緒氏の論に對する批判めいた言辞も、的外れなものであるということになるのかもしれない。しかしそれだけに、方法の問題を表面的な「方法論」にとどめて論じるべきではないだろう。当時の常識的な生活感覚や社会認識しか西鶴は持ち得なかった、あるいは、西鶴は典拠の持つ意味を改めたり歪めたりはしなかった、という限定の内での方法を論じる以上、その方法の解明そのものも、不十分なものとなってしまいかねないのではないか。

典拠を明らかにしていく過程で、『西鶴諸国ばなし』には、新しさはごく表面的な意味での「方法」にしか見出されず、やはり題材主義の低調な作品であった、ということが明らかにされたのであるならば、それでもよい。ただ、論じ尽くされた結果であるのか、論議を避けているのかが問題である。江本氏は先のような諸論の後、「西鶴諸国ばなし―伝承とのかかわりについて」を書くが、ここでは、西鶴の「意図」「認識」に言及せず、その技法―読者とともに共有している知識を生かし、作品世界へ移入させるやり方の解明を中心に論じている。このような、かつての問題意識からは後退ともいえる論の展開は、はたして、『西鶴諸国ばなし』に對する、江本氏の評価の変化を示しているのか、それとも単に掲載紙の性格に

合わせたにすぎないのか。気になるところである。

いずれにせよ、多くの典拠捜しの成果の陰に隠れて、かつて江本氏が提示した問題は、正面から論じられることが少なかったように思われる。その中であって、谷脇理史氏の「西鶴小説の説話的基盤―『宇治拾遺』『撰集抄』の役割」は例外的な存在であろう。氏はそこで、『宇治拾遺物語』と『撰集抄』とは西鶴にとつての同時代文芸であり、それを「横目でらみつつ相対化して超えようと」することを西鶴は意図していた、との仮説を提示している。『西鶴諸国ばなし』の各章が、そのような仮説をふまえて具体的に読み解かれているわけではないので、やはりこれも問題提起にとどまっただけではあるが、先行する説話集とはできるだけ異なった作品を書こうとする西鶴の意欲に着目した、西鶴の説話性そのものの問い直しが問題にされている。

ともあれ、現在の我々は、宗政五十緒氏・富士昭雄氏・江本裕氏・井上敏幸氏ら各氏の注釈書類をはじめとする、先学の多年の研究の恩恵に与かり、容易にその典拠調査の成果を知ることができる。これらの蓄積をふまえて、新たな深みへと踏み込んで行くことが許される時期が、既に来ているのではないだろうか。

もちろん、もう新たな典拠が見出される余地がない、という意味ではない。近年も、高田衛氏によつて巻二の「姿の飛びのり物」が、ほぼ一章全体にわたつて、『儀残後覚』巻七の「女房の手の出世に京へ上る事」に依拠していることが明らかにされている。また、杉本好伸氏も、巻二の六「男地蔵」の本文中にちりばめられたキーワードから酒吞童子説話との関係を説くという、これまでの典拠研究とは異なったアプローチを試みている。今後も、さまざまな新たな典拠が指摘される余地はあろう。

だが、西鶴が意識的・無意識的に用いた典拠をすべて明らかにすることなど、つまるところ不可能であろう。そして、それができなければ作品の価値や作者の認識の問題に踏み込めないというなら、永遠にそれらを論じることができなくなってしまう。

かつての江本氏の問題提起を正面から受け止めるべき時期がそろそろ来ていると考えても、尚早ではなからう。少なくとも、このような問題にまで踏み込みつつ考えることで、新たな典拠が見出されるきっかけが生じることもあろうし、何よりも『西鶴諸国ばなし』における「典拠」というものの意味が、明らかにされねばならない時期が来ているように思われる。そのような認識に立つての、新たな研究の方向性の模索が必要ではないだろうか。

五、典拠研究を超えて

―西鶴の主体性の所在―

典拠探しに重点を置いていた、従来の『西鶴諸国ばなし』研究の問題点は、二点に集約できるように思われる。ここまでの先行研究についての指摘では言っていることでもあるが、研究の現状についての展望をもまじえて、確認してみたい。

まず第一点は、その典拠や素材に対して、西鶴がどう向き合っているのか、という点の追究が十分にはなされていないことである。典拠と思われるものが発見された場合、それが中世の説話類であっても、また、同時代の事件に関する情報であっても、いかに西鶴の興味が幅広いものであったかというところで追究がとどめられ、西鶴がなぜそのような素材を選択したのかという問題は掘り下げられないことが多い。

例えば、徳田武氏は、巻四の二「忍び扇の長歌」の典拠を明代の恋愛物語集『情史類略』の中の「唐寅」であると説を提示している。氏自身も述べているとおり、和刻本・翻訳本の貞享以前の存在が認められない以上、直接の典拠とすることは不安があるが、間接的な典拠である可能性は十分にあるだろう。だとすれば、「忍び扇の長歌」は、唯美的・享樂的な『情史』の世界にふれ、その破格性の魅力を「唐寅」に感じ取った西鶴が、それを非人間的な身分制度に対する批判へ転化させたものであった、というのが氏の結論である。これ自体は、十分に説得力を持つ論理と言えそうである。

しかし、この一章を読み解きどう評価するのかという問題は、この新典拠の提示によつて大きく左右されることになるのだろうか。「唐寅」は「儒教の礼法への破格」であり、「忍び扇の長歌」は「身分制への破格」である、というように、「破格」ということを軸に両者を抽象化して考えれば、確かに先のような結論に至ることとなる。ただし身分制度云々という主張は、かつての陣崎康隆氏の説の追認という形で述べられている。典拠研究の側から新しく付与された意味によつて、旧説が補強されることがあつて悪いはずはないが、この一章の持つ作品としての意味は、改めて論じ直さずともよいのだろうか。また、これは、そういったことを左右しない程度の典拠にとどまるのだろうか。

その点で興味深いのが堀切実氏の「忍び扇の長歌」の読みである。氏は、本章後半の「さる御大名の姪御」の主張の中にある、「女の男只一人持つ事、これ作法なり」という一言に焦点をあて、この「再婚不義説」が当時の町人・武家社会

においてどのようなアリティを持ちえたかを、婚姻の実態に関する近年の研究成果を視野に入れつつ考察している。氏は、その中で、姫君の「自由恋愛」の主張が、当時の読者をも納得させる正当性を持ちつつも、半面、この『再婚不義説』はあまりに現実離れしており、珍奇なものでもあったと指摘している。この姫君の造形には、単なる武家社会に対する批判者という理解では片付かない、より複雑な側面があった。つまり、典拠が何であったかにかかわりなく、動かし難い個性を有した女性としてこの姫君は描かれており、それをどう読むかという問題がこの一章の理解・評価において重要であることを、堀切氏の論は示しているといえよう。

それにしても、なぜ「忍び扇の長歌」ばかりであるのか。他の章には独自の価値などなく、せいぜい典拠を幅広く器用につなぎ合わせたことしか評価できない、素材主義の作品であるということに尽きるのであれば、それも一つの見解であろう。だが、例えばそうであっても、その素材を取捨選択し、それを改編しつつ他の素材と組み合わせて行く西鶴の主体性を、十分に検討しつつ論じる必要があるだろう。

そのような観点からの近年の試みとしては、篠原進氏の『西鶴諸国はなし』の「へぬけ」および「西鶴というメディア―『天下馬』の毒」などをあげることができる。

例えば、巻一の「公事は破らずに勝」は、東大寺と興福寺の太鼓の貸し借りをめぐる確執の中、興福寺の学頭の老僧が知恵一箇の中の「東大寺」という書き付けを削り、新しくその上に「東大寺」と記して返す―を働かせて、本来の書き付けを不明にし、「先例の通り」にせよとの奉行による裁定を勝ち取る、という話である。これについて氏は、『愛宕百韻』の逸話―紹巴が、織田信長に対する謀反の決意を示した明智光秀の発句の「あめが下しる」を削り、再び同様に書き記して、後の吟味の際に難儀を逃れようとした話―を典拠とする先学の指摘をふまえて、西鶴がその逸話に、「乱世を生きたる文学者の処世術」を読み取ったからこそ用いたのだ、とする。そして、この一章を、東大寺と興福寺との確執という旧知の素材に仮託して、「綱吉の治世下という新たな乱世で流行作家の道に踏み出そうとする西鶴の決意と方向性を示唆」するもの、と結論づけている。

また、巻三の五「行末の宝船」の結末、すなわち、残された一人の男が「目安書」で生計を立てて長生したことには、否定的なイメージがともなっており、湖底に消えて帰って来なかった六人の立場に比して、幸福とは言い切れないとする。そして、この章冒頭の「人間程、物のあぶなき事を、かまはぬものはなし」や目

録の「無分別」が示す教訓性は相対化されているととらえて、このことは政治体制に対する鋭い批判にも通じると述べている。

西鶴の創作意識―さまざまな典拠を収集し改編していく、その主体的意志に大胆に踏み込んだ、大変刺激的な論稿であるといえよう。ただし、このように西鶴の対社会認識あるいは政治姿勢を軸に論じていった場合、そこまで生身の「西鶴」という存在を持ち出さなければ、この『西鶴諸国ばなし』という作品は読みえないものなのか、という疑問も生じてくる。

六、『西鶴諸国ばなし』の「空所」

―細部をどう読むか―

巻一の「公事は破らずに勝」を例にすれば、書き付けを削って再び同様に書くということだけに焦点を合わせて、『愛宕百韻』の逸話を重ね合わせたところに、先の篠原氏の読みは成立している。氏の論理を追っていった時には、思わず納得させられてしまうのであるが、逆に「新たな乱世で流行作家の道に踏み出そうとする西鶴の決意」という結論を念頭に置いてこの一章読み返したとき、かなりの違和感が感じられはしないだろうか。

東大寺と興福寺の太鼓をめぐる確執に奉行が判断を下すことと、幕府の出版統制との間には、直接の関連は読み取り難い。また、結果的には、『秋の夜の長物語』を思わせる大惨事になりかねないところを、穏便に収めたのであるから、この老法師は確かにすぐれた「知恵」を有していたと言えるが、この場合の興福寺側の態度は、借り手としては明らかに横暴であり、それを姑息な手段を用いて押し通したという感はずいぶん去れない。『愛宕百韻』の逸話は乱世を生きた知恵を直接に示しているかもしれないが、この一章の老法師の知恵そのものは、あくまで既得権確保のための不正行為なのである。本文の具体的な記述を消し去り、ここで示されているのはあくまで『愛宕百韻』の逸話である、と割り切った時にのみ、先の篠原氏の言う「西鶴の決意」が見えて来るのではないだろうか。

篠原氏のような読み方は不自然で恣意的ではないか、と指摘した場合、それは「大衆読者（レクトゥール）」と「精読者（リズール）」の違いの問題である、と氏からは反論されるだろう。さしあたり我々は、隠された西鶴のメッセージを読み取る力のある「精読者」のみを意識して考えればよいのかもしれない。だが、それでは、『西鶴諸国ばなし』に独立した作品として高い評価をあたえることは、やはり難しくなるだろう。西鶴がそのような認識を持ち得たかもしれないという、作家論としての可能性は追究できても、一個の作品としては完成度に欠けている、

ということになりはしないか。

近年のこの作品に関する論文については、同様の疑問を森田雅也氏の『西鶴諸国はなし』の形成―『懷視』からの考察^(注3)』に対しても感じる。森田氏は、様式美の追究という観点から、西鶴の創作視点を探ろうとするもので、篠原氏とは方向性を全く異にするものではあるが、従来の典拠研究とは別の切り口を試みたものである。ここで氏は、『諸国はなし』の各章の内容を抽象化してとらえ、復讐譚・失言譚・致富譚などに分類し、『武道伝来記』や『本朝二十不孝』との共通性を指摘して、作家の創作意識の展開を見出そうとしている。典拠の問題を捨象して作品をとらえ直す試み自体は大変刺激的であり、なぜ『諸国はなし』が書かれねばならなかったか、という形で西鶴の主体性へのアプローチそのものは興味深い。しかし、このように抽象化し分類してとらえることで各章の細部は切り落とされ、無個性なものと化してしまいかねない。

典拠の側からの作品の論断や、西鶴の創作意識の性急な追究の陰で、見落とされてきた記述がありはしないか―このような問題こそが、実は、『西鶴諸国はなし』研究のもう一つの問題点として指摘したいことなのである。

文学作品は、もともと読者にその解釈を委ねるような「空所」を有している^(注4)。それが、「恰も片舟に乗て急流を下るに山飛び岩走り、花も草も精しく観るに違(いとま)なき所を過て」いく趣の、省略と飛躍の多い西鶴の文体であれば、なおさらのことであろう。とりわけ、各章が岩波新大系で二三ページに収まってしまう『西鶴諸国はなし』において、どこか説明不足にも思える記述が目立つのは当然のことでもある。

だが、それにしても何やら思わせ振りの「空所」が目立ちほしくないだろうか。例えば、巻二の一「姿の飛びのり物」は、不思議な乗物が、池田・芥川・松尾・丹波に出没し、その中にいる者を見る人ごとに姿を変え、人々を恐れさせたというものである。高田衛氏が典拠として『義残後覚』の一話をあげていることを先に示したが、それは、狸の仕業であったという種明かしを結末としていた。それが「姿の飛びのり物」では、「慶安年中迄はありしが、いつとなく絶て、橋本狐川のわたりに、見なれぬ玉火の出しと、里人の語りし。」という形で、その原因を曖昧にしたままの結びとなっている。なぜこのように、とらえどころのない印象を与える怪異譚に改めたのか。

巻三の六「八疊敷の蓮の葉」は、策彦和尚と織田信長との逸話で結びとなっている。摩伽陀国の大きな蓮の話を聞いた信長は笑い、策彦はそのために涙して、「信長公天下を、御しりあそばす程の、御心入れには、ちいさき事の思はれ」と

言ったという。小さいのは信長の心なのか、あるいはその心に比しての八疊敷の蓮の葉であるのか、いささか分かりにくい。そもそもこの一章は、無知な村人を前にして、吉野に隠棲する道心者が、「おの／＼広き世界を、見ぬゆへ也」と、広い世界の様子を語る、という構造になっている。その道心者の口から、広い世界を見知った策彦和尚が信長に笑われて涙した逸話が最後に語られ、一章の結びとなっていることは何を意味していると考えればよいのだろうか。

巻三の七「因果のぬけ穴」では、敵の家へ忍び込んだ親子が、焼き飯で番犬を手なづけたり木切れを加えて犬の鳴きまねをしたりするが、これらは普通の武士の行動としてはおかしくはないのか。巻四の二「忍び扇の長歌」の姫君は、よりによって、なぜ「女のすかぬ」中間に自分の方から惚れたのか等々―これらの章は、いずれも、目録章題下の「因果」「名僧」等に見重きを置いた解釈からは、説明しづらい部分を含んでいる。そしてそれは、同じ章の他の部分との矛盾・飛躍をも感じさせ、読むものをとまどわせているように思える。

もちろん、先にも述べた通り、これらの中には、典拠を示して、そのような意外な展開となっていることの原因を、作者の側から説明することが可能なものがあるうし、既にそれがなされているものもある。それでもなお、なぜここでこのような典拠を利用したのか、という問題は残る。典拠をふまえて読むことが、作品世界にどのような意味を与えてくれるのか、また、くれないのか。典拠の所在を言い当て、西鶴の創作過程を想起するという作業を経なくては、価値を見出せない作品であるのか。作家の実像に関心を持つ「精読者」と、新味のある奇談を単純に喜ぶ「大衆読者」の他に、典拠などさして知らずとも、あるいは、知っていてもそれで満足せずに、西鶴のはなしの世界を丁寧に読み味わおうとする「精読者」の存在を想定してもよいように思う。

理屈をいくつ並べてみても、それだけでは意味はない。そのような観点で『西鶴諸国はなし』を読み直し、新たな読みを具体的に提示しなければならぬわけだが、現段階では今後の課題という外はなく、また、紙数の余裕もない。とりあえずは、以上でこの稿を終えることとしたい。

(注1) 暉峻康隆氏「西鶴研究と評論(上)」(中央公論社・昭和三年)

(注2) 暉峻康隆氏「西鶴文学の說話性と非說話性」(『国語と国文学』昭和七年一〇月)

(注3) 永積安明氏「説話文学の本質」(『国文学』昭和三年十一月)等参照。

(注4) 森山重雄氏「咄の伝統と西鶴」(『封建庶民文学の研究』三一書房・昭和三五年)

(注5) 水田潤氏「西鶴『諸国はなし』の近世的性格」(『論究日本文学』三六号・昭和四七年三)

月)

- (注6) 岸得蔵氏「『西鶴諸国はなし』考―その出生をたずねて―」(『国語・国文』昭和三十一年二月)
- (注7) 江本裕氏「『西鶴諸国はなし』説話的発想について」(『近世文芸』八号・昭和三十七年十一月)
- (注8) 堤精二氏「近年諸国咄」の成立過程」(『国文学論叢』研究と資料「至文堂・昭和三八年」)
- (注9) 金井寅之助氏「諸艶大鑑の版下」(『文林』二号・昭和四二年十一月)
- (注10) 富士昭雄氏「『西鶴の構想』」(『西鶴論叢』中央公論社・昭和五〇年)
- (注11) 井上敏幸氏「『西鶴諸国はなし』の素材と方法―巻一の二公事は破らずに勝つ―」(『静岡女子大学研究紀要』八号・昭和四九年)
- (注12) 井上敏幸氏「『西鶴諸国はなし』攷―仙郷譚と武家物―」(『国語国文』五〇六号・昭和五一年一〇月)
- (注13) 宗政五十緒氏「『西鶴諸国はなし』の成立」(『西鶴論叢』中央公論社・昭和五〇年)
- (注14) 浅野晃氏「『柳久一世の物語』と『西鶴諸国はなし』―方法と主題―」(『国語国文』四一号・昭和四三年十一月)
- (注15) 小峰和明氏「今昔・宇治成立研究の現在―宇治大納言物語の幻影など」(『国文学』昭和五九年七月)、久保田淳氏「情念の湖海へ―道命・和泉式部説話を通して」(『別冊国文学』今昔物語集宇治拾遺物語必携「昭和六三年一月」)等参照。
- (注16) 佐藤信夫氏「レトリック感覚」(講談社・昭和五三年)「レトリック認識」(講談社・昭和五六年)等による。
- (注17) 江本裕氏「西鶴に於ける説話の方法の意義―雑話物を中心として―」(『国語国文学研究』(熊本大学法文学部)一号・昭和四〇年八月)
- (注18) 江本裕氏「西鶴小説における『説話性』について(一)」(『国文学論考』(都留文科大学)四号・昭和四二年十二月)
- (注19) 江本裕氏「『西鶴諸国はなし』と『懷硯』」(『国文学』昭和四五年十二月)
- (注20) 江本裕氏「『西鶴諸国はなし』伝承とのかかわりについて」(『伝承文学研究』一七号・昭和五〇年三月)
- (注21) 谷協理史氏「西鶴小説の説話的基盤―『宇治拾遺』『撰集抄』の役割」(『近世文芸論叢』中央公論社・昭和五三年)
- (注22) 高田衛氏「大会テーマ『文学として読む』とはどういうことか」へ向けて」(『日本文学』平成六年九月)
- (注23) 杉本好伸氏「西鶴と説話―『酒吞童子・道真』をめぐる手法―」(『国語国文学論集』(安田女子大学)第二五号・平成七年)
- (注24) 徳田武氏「西鶴と十七世紀中国文学―『西鶴諸国はなし』と『情史』―」(『西鶴新展望』勉誠社・平成五年)
- (注25) 堀切美氏「『忍び扇の長歌』の読み」(『江戸文学』一三三号・平成六年十一月)
- (注26) 篠原進氏「『西鶴諸国はなし』のへぬけ」(『日本文学』平成元年一月)
- (注27) 篠原進氏「『西鶴』というメディア―『大下馬』の毒」(『日本文学』平成六年一〇月)

(注28) 森田雅也氏「『西鶴諸国はなし』の形成―『懷硯』からの考察」(『近世文芸論―ロマネスクと変容』翰林書房・平成七年)

(注29) イーザー、轡田収訳「行為としての読書」(『岩波書店・昭和五七年』)

(注30) 幸田露伴「井原西鶴」(『国民之友』明治三十三年五月・『露伴全集』第十五巻所収)
(平成7年9月6日)